ジョージ・ハーバートの「祈り」
――極楽鳥を巡るひとつの解釈――

山根　正弘

the Iles / of Ternate and Tidore, whence Merchants bring / Their spicie Drugs…
（テルナテとティドレの島嶼、そこから商人が香辛料を買い付ける）
（ミルトン『失楽園』第２巻638-40行）[1)]

はじめに

17世紀イギリスの宗教詩人ジョージ・ハーバート（George Herbert, 1593-1633）の詩集『聖堂』（*The Temple*, 1633）に「祈り」（“Prayer”）と題する詩が２編納められている。「祈り」[1] は14行で記されたソネットで、当時流行したいわゆる「定義詩」（definition poem）に分類される[2)]。詩の冒頭、「祈りは教会の宴、天使の永世」（“Prayer the Churches banquet, Angels age”）と始まり、そのあと続けてハーバートが瞑想で得た様々なイメージが列挙され、最後に「心にそれと悟られたもの」（“something understood”）という語句で全体が統括される[3)]。27箇ほどのイメージのひとつに、「極楽鳥」（“the bird of Paradise”）がある。大航海時代ヨーロッパでは、次々と新奇な動植物やその逸話が新世界から報告され人々の心を魅了したが、極楽鳥もそのひとつであった。またこの詩には、海の深さを量る「測鉛」（“plummet”）、航海の途中夜空を見上げ観察される「乳白の銀河」（“The milkie way”）それに東インドネシアのモルッカ諸島を想起させる「香料の国」（“The land of spices”）などがあり、極楽鳥も当然その文脈の中で解釈するのが妥当であろう。というのも、ハーバートの詩集には、ココナッツ、砂糖黍そしてドルフィンという名の魚シイラなど

航海時代と結びつく語句が鏤められていて、未知の天地に対する詩人の憧憬が窺える[4]。だが、ハーバートが祈りを定義する際、本当に航海時代の産物としての極楽鳥をイメージとして援用したのであろうか。旧世界から知られる極楽鳥はイメージを形成する際、材源（ソース）として用いられなかったのか、それを検証するのが本稿の目的である。

なお、極楽鳥とは、パプア・ニューギニアおよびその周辺の島嶼、そしてオーストラリアの東部に分布するフウチョウ科（Paradisaeidae）に属する約43種の総称である。雄鳥は羽毛が見事な極彩色を示し需要が高い。また繁殖期には特異な求愛行動で雌鳥の気を引くことで有名である。大航海時代、香辛料交易者により極楽鳥の剥製がヨーロッパに持ち込まれたとき、この鳥には脚が付いていなかった。現地の人々によって腐りやすい箇所はすでに取り除かれ、腹部にはスパイスで防腐処理が施されていた。交易者は飛翔中の鳥を見る機会がなく、その標本とともに誤った伝聞情報が報告された。つまり、極楽鳥は地上に舞い降りることなく天露のみを食すると。18世紀の終わり、ゲーテ（1749-1832）の『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』に極楽鳥の逸話が援用されている。ヴィルヘルムは旅芸人一座と『ハムレット』を演じるはめになり、座長の妹アウレーリエから極楽鳥との渾名を付けられる。その謂われを尋ねると、彼女は「極楽鳥には足がなくて、空中を漂って、エーテルを食べて生きてるんですって。作り話。詩的な作り話よ」と答える[5]。

イギリスに生きたまま極楽鳥が持ち込まれその雄姿が明らかになるのは、19世紀も半ばを過ぎた1862年であった。チャールズ・ダーウィンに自然淘汰による進化論の影響を及ぼしたA・R・ウォレス（Alfred Russel Wallace, 1823-1913）がシンガポールで購入し持ち帰ったのが、最初である[6]。ちなみに、日本では鎖国時代、オランダより剥製がもたらされたとき、風に乗って飛び風を食餌とするとの言い伝えから、フウチョウ（風鳥）との名が付けられた。

I　新世界の極楽鳥

> . . . prayer, which if it be necessary even in temporal things, how much more in things of another world, where the well is deep, and we have nothing of our selves to draw with ?
> （祈り、それは現世でも必要であるが、あの世ではさらにもっと必要となる。そこでは井戸は深く、我々は汲み上げる物を持っていないから）
>
> （ハーバート『田舎牧師』第４章「牧師の知識」）[7]

1497年12月、ヴァスコ・ダ・ガマによって新しい貿易ルート、すなわち喜望峰経由のインド航路が発見される。ポルトガルの目的は、インドでイスラム教徒によって収集される香辛料が紅海を経てカイロに達し、北イタリアの諸都市ヴェネツィアやジェノヴァに至るルートの打破であった。エンリケ航海王子による航海術の進展と貿易促進の政策以来の成果が現れ、東洋貿易の扉が大きく開かれた。リスボンの薬種商トメ・ピレス（Tome Pires, c. 1466- c. 1524）は香辛料を求め1512年から1515年までマラッカに滞在し、その間の見聞を基に、紅海から中国までを扱う『東方諸国記』（*The Suma Oriental*, c. 1515）を著す。第５部第３章「香料の島々」に極楽鳥が登場する。

> バンダンの近くには三つの島がある。パプア島からレノ鸚鵡が来る。もっとも珍重されるものはダルと呼ばれる島［アル諸島］から来る。かれらは神の鳥（バサロ・デ・デウス）［極楽鳥］と呼ばれる死んだ鳥を携えて来る。この鳥は天から来るもので、だれも生まれるところを見たことがないということである。トルコ人とペルシャ人はこれから羽根飾りを作る。これはその目的にかなうものである。ベンガラ人がこれを買い入れる。これはよい商品であるが、わずかしか来ない[8]。

16世紀前半ヨーロッパで香辛料貿易の先駆者となったポルトガルは、未知の大洋には化け物や怪物が現れるという中世以来の迷信を利用しつつ、香辛料の在処を極秘にし、ヨーロッパの競合国、特にスペインの貿易者や冒険者を遠ざけていた。その間に香料の宝庫モルッカ諸島のひとつテルナテ島に要塞を築き、権益を侵害されないよう足場をより堅固なものとした。上記引用は、航海時代以降おそらく最初の

極楽鳥の報告となるはずであったが、ポルトガルの秘密政策のため広くヨーロッパ人の知るところとならなかった。

隣の強国スペインもポルトガルに負けじと触手を伸ばし勢力範囲を拡大していった。ジェノヴァ人クリトーバル・コロンことコロンブス（Chritopher Columbus [Cristobal Colon], 1451-1504）はイサベルとフェルナンド両王によって援助を受け西方を目指し出帆した。コロンブスが第一回目の航海で発見した新天地（カリブ海の島嶼）、そこを彼自身はインドの東の果てにある地上の楽園であると堅く信じてやまなかったが、新大陸アメリカを植民地とする足掛かりを築いた。さらに、母国ポルトガルに背を向けたマガリャンイス、すなわちマゼラン（Ferdinand Magellan [Fernao de Magalhaes], c. 1480-1521）は、スペイン皇帝カルロスの援助を仰ぎ、モルッカ諸島にクローヴ（clove）とナツメグ（nutmeg）やメース（mace）を求めて出航する。ポルトガルの追跡を避けるため従来の航路、つまりアフリカの喜望峰を経由してインドに向かわず、新しく発見されたアメリカの南、後に彼を称えてその名前が付けられるマゼラン海峡を通過し、初めて太平洋を横断してインドに至る航路をとった。出港したのは、1519年。同航者二百数十名。残念ながら、マガリャンイスはモルッカ諸島の所在を確認する前の1521年4月26日、フィリッピンのマクタン島で住民との紛争に巻き込まれて命を落とす。スペイン人デル・カーノ［エルカーノ］が遺志を継ぎ、翌年、目的を果たしてヴィクトリア号でセビリャに帰港する。帰還者は18人であったというから、西回りの世界周航が壮絶な闘いであったことが窺える。幸運な帰還者イタリア人アントニオ・ピガフェッタ（Antonio Pigafetta）の手記が、1525年に海賊版ながら仏訳が、そして1536年には不完全ながらイタリア語版が世に出て、航海の記録が広くヨーロッパに知れ渡った。ピガフェッタによると、1521年12月17日、モルッカ諸島のひとつバチャン島の王がスペインの国王への服従の印しにと鳥の剥製をふたつ贈った、とある。

> この鳥は鶫（つぐみ）ほどの大きさで、頭は小さく、嘴（くちばし）が長い。脚は長さが一パルモ［約二十一センチ］ほどで羽根ペンのように細い。いわゆる翼はなくて、そのかわりに色とりどりの長い羽根があり、それは帽子につける大きな羽根飾りのような形をしている。尾も鶫に似ている。翼にあたる部分をのぞいては、羽根の色はすべて褐色である。この鳥は風が吹いているときしか飛ばない。かれらの話によれば、この鳥は地上の楽園からやってきたのだという。それで、この鳥の名前はボロン・ディナータ、すなわち「神の鳥」というのである[9]。

これが、航海時代後はじめて広くヨーロッパに公開された極楽鳥の報告である。香料諸島として知られクローヴを産出するモルッカ諸島やナツメグを産出するバンダ諸島は、局地的な交易の拠点ではあるが、火山島であり食糧を周囲に島々に依存している。したがって、ニューギニアなどから、主餌のサゴ澱粉とともに珍しい鸚鵡や極楽鳥が運ばれ交換されたのである[10]。

当時地球の大きさはまだ明確に知られていなかった。緯度の計測は可能であったが、経度は18世紀に精度の高いクロノミーターが発明されるまで時を要した。太平洋は意外に広大無辺で、スペインが西回りで香料諸島に向かい貿易するメリットが少ないことが次第に判明してきた。そこで新世界アメリカに目を向けるようになった。最初の航海者は楽園の如き自然に目を奪われ叙景に力を注ぐだけであったが、征服者となったスペインは地理や地誌だけでは飽きたらず、住民の人種、風俗、文化や宗教に興味を抱き記した。聖職者ホセ・デ・アコスタ（Joseph of Acosta, 1540-1600）の『新大陸自然文化誌』（*Natural and Moral History of the Indies*, 1590; English version, 1604）もそのひとつで、第4巻第37章には新大陸の固有の鳥が描かれる。

> 新大陸には珍しい鳥がたくさんいる。シナから持って来た鳥に、大きいにも小さいにも足がぜんぜんなく、からだのほとんど全体が羽毛で、けっして地面に降りず、身につけた糸状のものでからだを枝に結びつけて寝る鳥がある。蚊や空中の虫を喰らう[11]。

鳥の名前は明記されないものの、これまでの引用から解るとおり極楽鳥の記述である。デ・アコスタは新大陸の自然や文化を科学的に分類し分析を試みたというが、

当時大方の西洋人が抱いていた極楽鳥の通念が示されているだけである。ただ、食するものが天露や霞ではない点、進歩といえる。

北海に面する低地帯オランダは、もとより漁業と海運業が発達していた。リスボンを拠点に香辛料の中継ぎ貿易で利益を上げていた。しかし、16世紀の半ばより、新旧の信仰をめぐる相違からスペイン支配を脱する気運が高まる。1580年、ポルトガル王室が途絶え、スペインが吸収合併すると、フェリペ二世はオランダ船のリスボンへの出入りを禁止する。オレンジ公ウィリアムを盟主とするオランダは、両インドに目を向け進出を目論む。喜望峰経由とマゼラン海峡経由とでアジアに船団を送り込むが、その契機を与えたのがリンスホーテンのインドへの旅行記であった。ヤン・ハイヘン・ファン・リンスホーテン（Jan Huygen van Linschoten, c. 1562-1611）は、まだインドへの航路が開示される前、ポルトガル商船に乗り込みインドへ向かった。先述のデ・アコスタ著『新大陸自然文化誌』をオランダ語に翻訳したリンスホーテンは、インドへの航路だけではなく、文化や風習、動植物などをつぶさに書き留め、旅行記三部作のひとつ『東方案内記』（*Discours of Voyages into the East and West Indies*）を1596年に出版した。その第21章「モルッカ諸島についての報告」に極楽鳥の記述がある。

> この諸島にしか見出されない鳥がいる。これを、ポルトガル人はパサロス・デ・ソルすなわち太陽の鳥と、イタリア人はマヌ・コディアタスと、そしてラテン語学者はパラディセアスと称するが、われわれは、その羽毛がほかのどんな鳥よりも優れて美しいところから、これをパラディス・フォールヘン［オランダ語、極楽鳥の意］と呼んでいる。この諸島でも、死んで落ちたもののほか、この鳥の生きた姿はけっして見られない。太陽に向かって飛んでいき、地上に降りることなく、つねに空中に留まっているということであるが、インディエにもたらされたものを見てもわかるように、なるほどこの鳥には脚も翼もなく、頭と胴体だけで、しかもその大部分が尾なのである[12]。

2年後の1598年、ロンドンの印刷業者ジョン・ウルフ（John Wolfe）が英訳を出版する。

> . . . in these Ilands onlie is found the bird, which the Portingales call *passaros de Sol*, that is fowl of the Sunne, the Italians call it *Manu codiatas*, the Latinists, *Paradiseas*, by us called Paradice birdes for the beauty of their feathers which passe al other birds: these birds are never seen alive, but being dead they are found upon the Iland: they flie, as it is said, alwaies into the Sunne, and keepe themselves continually in the ayre, without lighting on the erath, for they have neither feet nor wings, but onely head and body, and most part tayle as appeareth by the birdes that are brought from thence into India . . . (“Of the Iland of Maluco”)[13]

オランダは香辛料貿易の先駆者ポルトガルとスペインの間隙を衝く形でインドに乗り込み、あわよくば新たな取引先を確保し拠点を設け、そして独自の販路の拡大を図った。一方イギリスは、エリザベス女王の公認の許、私掠船（海賊船）が活躍し国庫を潤した。ドレイク船長は1577年12月にプリマスの港を出帆、マゼラン海峡を経由し太平洋とインド洋を渡り、アフリカ南端を回り1580年9月帰港した。イギリス人で初めて世界周航を果たす。途中1579年、フィリピンのミンダナオ島を航行した後、モルッカ諸島のひとつティドレ島に立ち寄りクローヴを仕入れるが、極楽鳥を書き留めることはなかった[14]。

1600年12月31日、イギリスに（俗称）東インド会社（the Governor and Company of Merchants of London trading into the East Indies）が設立される。第一回目の東インドへの航海で、アフリカ経由でモルッカ諸島に寄港するも、やはり極楽鳥に出会うことがなかったらしい。探検・旅行記の編者リチャード・ハクルートの後継者サミュエル・パーチャスの『巡礼記』（*Purchas his Pilgrimes*, 1625）に収録された報告によると、アジア水域を回航した最初のイギリス人ランカスター（Sir James Lancaster, c. 1554-1618）率いる船団が1601年、プリマスより出帆しスマトラのアチェンやジャワのバンタンで商談を済ませたあと、小船をモルッカ諸島に派遣したとあるが、やはり極楽鳥の記述はない[15]。

1603年2月、ランカスターはバンタンを去るが、同地に商館を残す。商館員の一

人エドマンド・スコットが、1606年5月イギリスへ向けて出発するまでの記録を残している。現地住民との取引の実態と中国人やオランダ人とのトラブルの報告が中心で、博物学的な記述に乏しく、極楽鳥は登場しない[16]。

ハーバートが上記の報告のうち、どの筋から極楽鳥の情報を得たかは特定できない。だが、重要なのは、イギリスの貴族や文人を取り巻く世界の中にハーバートも置かれていたということである。兄弟に駐仏大使の長兄エドワードをはじめ、宮廷饗宴局長の六男ヘンリー、海軍士官の七男トマスがいる。母親のマグダレンはセント・ポール大寺院の首席説教師ジョン・ダンの庇護者であり、母親の再婚相手ジョン・ダンヴァーズは新大陸の入植と貿易を扱う企業ヴァージニア・カンパニーに投資していた。友人で宗教共同体リトル・ギディングの創始者ニコラス・フェラーもかつてはヴァージニア・カンパニーの関係者であった。つまり、新世界の特異な情報が身近に手に入る情況にあったといえる。そうだとすると、たしかにハーバートが楽園を連想させる新奇な鳥、中空を舞い彼岸と此岸の橋渡しをする極楽鳥を祈りの定義として詩の中に取り入れ、斬新なイメージを紡ぎだしたとしても不思議ではない。

Ⅱ　旧世界の極楽鳥

> *Prayer* is well said to be the speech of angels: in fact, nothing among the utterances allowed to mankind is felt to be so divine. It brings us near to the Infinite. . .
> （祈りとは、天使の歌声とはうまく言ったものだ。事実、人間に許された発話の中で、祈りほど神々しいと感じられるものはない。神の許へと誘なう）[17]

『東方見聞録』によると、マルコ・ポーロは往路にシルク・ロードを用いた。13世紀チンギス・ハーンが大帝国を築き、ユーラシア大陸を東西に結ぶ幹線道路で安全に通行できるようになったからだ。帰路に用いたのは、スパイス・コースと呼ばれる南海航路であった[18]。南中国、東南アジア、インド洋、アラビア海そしてペルシャ湾を経て北イタリアのヴェニスに戻った。中世ヨーロッパは香辛料をイスラム教徒の商人より買い付けていた。地中海文化圏にアラブ世界を通じて様々な東方の情報が流入していたといえる。ただ、マルコ・ポーロの場合もそうであったが、彼自身が見聞した事柄は真実味を持って伝えることができたが、人づてに聞いた黄金の国ジパングの逸話などを語る際首を傾げざるを得ず、虚実入り混じった情報が流入した。

航海時代が始まる前、ヨーロッパ人が抱いていたアジア像は、14世紀マンデヴィルの旅行記（*Mandeville's Travels*, c. 1360）に見られるように、魑魅魍魎、化け物や怪物の棲む未知の世界であった。例えば、アラビアの不死鳥フェニックスは、世界に一羽しかいない鳥で天国の鳥と呼ばれる。天気が晴朗なとき、上空を舞っているのを見ると、その者は幸福になれる、という話に出会う[19]。これまでの極楽鳥の描写と一部重なる描写がある。マンデヴィルは中世百科全書の知識やマルコ・ポーロの知見を材源とし東方の世界像を決定付けた。だが、その大半は眉唾な空想物語であるものの、新しいや情報や事実も含まれている。色鮮やかな極楽鳥の情報も、アラブ世界経由でヨーロッパにすでに伝わっていた可能性がある。

いわゆる12世紀ルネサンスによって、アラブ世界に保存されていた古代ギリシャ・ローマの文化、特にアリストテレスが甦る。すでに原本が消滅していた哲学の精髄がアラブの翻訳を通じて再びヨーロッパに紹介され、スコラ学派が誕生する[20]。中世のスコラ学者アルベルトゥス・マグヌス（Albertus Magnus [Saint Albert the Great], 1193-1280）によると、極楽鳥の鳴き声を聞く者は信仰心を呼び起こし楽園・天国に誘われるかの如きであるという。

> AVES PARADISI (Birds of Paradise) were so named by the Egyptians who were impressed by the brilliance of their plumage. These birds, which are comparable to geese in size, set up a mournful cry when they are trapped, and never cease until they perish or obtain their freedom. But, in the free state they sing a song so melodious it enthralls the heart of every hearer. They live along the Nile River which is reputed to flow from Paradise.
>
> In the same region there is another species called "birds of paradise"; these

are tawny in color and about as large as jackdaws. Apparently, they are given the name simply because nothing was known about their site of origin nor the route by which they arrived in the region, for they are a migratory species that annually leaves for parts unknown. (23:28)[21]

（極楽鳥の名は、羽毛の美しさに感銘を受けたエジプト人によって付けられた。この鳥の大きさは鵞鳥ほどで、捕らえられたとき悲しい鳴き声をあげ、死ぬか解き放たれるまで泣き止むことはない。しかし、自由闊達なときは歌声がとても心地よく、聞く者は皆、心奪われる。楽園を水源とすることで有名なナイルの川岸に棲息する。同じ地域にもう一種の極楽鳥がいる。色は黄褐色で、大きさは小鴉ほどである。おそらく、名の由来は発生の場所や飛来する航路が不明である点にある。というのも、渡りをする種で毎年見知らぬ場所に向けて旅立つので。）

マグヌスの極楽鳥を現在の生物学的な分類の観点から同定する材料はなく、新世界の極楽鳥と属・種を比較することはできない。ただ、同じ名前の鳥、同じような属性の持ち主であるとしかいえないが、鳥の歌声に触れている点は古くて新しい。

マグヌスと同じドミニコ会派の修道僧ボーヴェのヴァンサン（Vincent of Beauvais [Vincentius Bellovacensis], c. 1190-1264）も中世最大の百科全書『大きな鏡』に収録された一冊『自然の鏡』（*Speculum naturale*）で、極楽鳥を描写する際ほぼ同じ説明をする。ヴァンサンは引用の出典としてカンタンプレのトマス（Thomas of Cantimpre [Thomas Cantimpratensis], 1201-1263/72）の博物学的百科全書『事物の本性について』（*De natura rerum*）を挙げているが、トマスもドミニコ会派の修道僧であり、しかも一時期マグヌスがパリで神学を講じていたときの聴講生であった。現在三者の作品は完成した時期が特定できず、どの作品が極楽鳥の出所なのか不明であるが。だが、マグヌスの「心奪われる」との記述がヴァンサンでは「歌声は美しく澄んでいるので、それを聴くと人は敬虔な思いと喜びとが心に湧いてくるような気がした」と変更され、さらに宗教的な意味合いが強められている[22]。

マグヌスやヴァンサンのように、聖職者が自然の事物・事象に興味を抱くのは当然人間本来の好奇心の表れでもあるが、この世界に充満する被造物を創造した神の

御業を称える勤めでもあった。したがって森羅万象、特に生き物は寓意的に解釈され、宗教的な意味づけに援用される。イギリス・ルネサンスの博物誌家エドワード・トプセル（Edward Topsell, 1572-1625）も、上記の伝統に立つ聖職者である。彼の『天上の鳥、または鳥類誌』（*The Fowles of Heauen or History of Birdes*, c. 1613-4）は現実及び架空の鳥にまつわる古代から当代に至る知識の集成で、主にイタリアの医師・博物誌家アルドロヴァンディ（Ulysse Aldrovandi, 1522-1606）の翻案である。当時はまだ鳥類学上の分類が未発達で、トプセルも文法書と同じ概念で鳥をアルファベット順に並べる。残念ながら未完でCの項で終わっているが、かろうじて極楽鳥を含むBの項目は現在に残っている。

In Ethiopia and East India from whence our authors haue fetcht their descriptions, they are called *Manucodiatae*, that is in our language, *The Birds of God*, bycausse they see them till they fall vpon the earth, and doe belieue that they come from heauen, for neuer man founde any originall place of their generation. And moreouer bycause of the rare elegancie and colour of their feathers which no other fowle or earthlie Creature can equalize or paralell, they are therefore called *Birdes of Paradice*. . . they liue in the Paradise which Adam lost, alway aboue in the ayer, and are susteyned with the dewe of heauen. . .[23]

（典拠となる著述者が資料を集めたエチオピアと東インドには、「神の鳥」と呼ばれる鳥がいる。その訳は、地上に落ちるまで目にすることはなく、発生の場所もわからず、天上から飛来すると信じられているので。さらに、羽根の類い希な色艶は、他のいかなる鳥も地上のいかなる生き物も及ばず、極楽鳥と称される。［中略］アダムが失った楽園に棲み、常に空中に留まり、天の露で生をつなぐと信じられている。）

トプセルの博物学的な知識はある時は眉唾である。出所となったアルドロヴァンディやゲスナーと同じく、逸話の入り混じった寄せ集めである。極楽鳥の描写も極彩

色のインコやアラビアのフェニックスと一部重なり、天露との連想から空飛ぶカメレオン説まで紹介されている。さらに、マゼランに同航したピガフェッタが極楽鳥には脚があるとの報告を看過している。だが、聖職者であったトプセルの真骨頂は、博物学というより宗教的な色彩にある。ロンドンの教区牧師であったトプセルは、前作『動物誌』(*The Historie of Foure-Footed Beastes*, 1607) や『爬行動物［爬虫類・両棲類］誌』(*The Historie of Serpents*, 1608) と同様、神の御業により出来した多種多様な鳥類を描くだけではなく、その鳥が聖書の解釈にどのように役立つか、つまりエンブレムを説く。極楽鳥には、ふたつのエンブレムがあるとする。ひとつは、「［罪の］重みがなければ上へ」(“*Sine pondere sursum*”) もうひとつは、「魂が［天の］高みを懇願するように」(“*Sic animus petat alta*”) である。緒言(プロレゴメナ)でも、「極楽鳥は死ぬまで常に空高く舞い、肉体が大地に落ちるとき魂が昇天する人間を表す」(“The birdes of paradise, living alway aloft in the aer till they die, are Emblemes of men whose soul goeth vpward when his body falleth into ye earthe.” p. 25) と、宗教的な意味と結び付けられる。

トプセルと同様、ハーバートも晩年の3年間、ソールズベリー近郊の僻村ベマトンで教区牧師を勤めた。教区民の生活を間近に観察しつつ、彼らを教導し魂の救済を目指した。その記録は、やや美化・理想化された形で『田舎牧師』(*The Country Parson*, 1652) として死後出版される。聖職者兼詩人のハーバートは中世スコラ学派の伝統を踏襲しながらも、博物学者と違う形態の表現形式でイメージという戦略を採った。極楽鳥でイメージされるものは、たしかに新世界の楽園の可能性も否定できない。というのも、「祈り」[1] で最後に規定される語句は、本稿の冒頭で言及したとおり「心にそれと悟られたもの」であり、極楽鳥を用いた真意は精確に明示されず、読み手の解釈に委ねられる。しかし、筆者には旧世界アラブ、イスラム教徒から啓示を受けた信仰への渇望と魂の昇天と捉える方が妥当性があるように思われる。

むすび

教区牧師ハーバートの関心事は、教区民の信仰を如何にして深化させるかであった。抽象観念を如何に具体化して提示するかに心を砕いたという。ステンドグラスはひとつの道具であった。説教に耳を遠ざける村人に、甘美な韻律でキリストの教えを誘う詩はもうひとつの道具であった。その詩ではイメージが大きな役割を果たした。祈りを定義する際、楽園という語を含む鮮烈な名前とともに、地上に舞い降りることなく天露のみを食するという新世界の極楽鳥は、魂の彼岸から此岸への橋渡しを連想させる格好の題材であったと考えられる。

だが、さらに注目したいのは、旧世界からすでに報告されている極楽鳥の歌声である。アラブ、イスラム文化圏から伝わった情報であったとしても、詩の韻律と同様、聴く者に法悦を与え信仰心を覚醒させるという極楽鳥こそ、詩人ハーバートにとって祈りを具現化するイメージとして相応しかった思われる。祈りと極楽鳥とを紡ぎ合わせるものは、魂の解放であり、信仰の深化である。

註

1) *The Complete English Poems of John Milton*, ed. John T. Shawcross (New York: New York University Press, 1963) 258.
2) Rosemond Tuve, *Elizabethan and Metaphysical Imagery* (Chicago: The University of Chicago Press, 1947) 299-305. Cf. Gerald Hammond, “Herbert’s Prayer I,” *The Explicator* 39 (1980): 41-43.
3) ハーバートの詩の引用は、*The Works of George Herbert*, ed. F. E. Hutchinson (1941; corr. rpt. Oxford: Clarendon Press, 1945) による。詩の解釈および和訳については、石井正之助「George Herbertのソネットについて（注解のひとつの試み—2)」創価大学英文学会編『英語英文学研究』第9号（1981年3月）1-10頁を参照した。
4) 山根正弘「ドルフィンという名の魚—ジョージ・ハーバートと変色のエンブレム—」『博物誌の文化学—動物篇』(鷹書房弓プレス 2003年）101-15頁参照。
5) ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(中)、山崎章甫訳（岩波文庫 2000年）197頁。
6) A. R. Wallace, *The Malay Archipelago: The Land of Orang-utan and the Bird of Paradise* (1869; rpt. New York: Dover, 1962) 419-40. 内田嘉吉訳『南洋』(柳生南洋記念財団 1931年）617頁；『マレー諸島　オラウータンと極楽鳥の国』宮田彬訳（新思索社1995年）532-56頁。
7) ヨハネ福音書4章7節から15節、特に11節を参照。祈りは、永遠の命に至る生きた水を汲み上げる釣瓶に喩えられる。その水は決して渇くことがなく、その人の内で泉となるという。
8) トメ・ピレス『東方諸国記』生田滋他訳、大航海時代叢書V（岩波書店 1966年）352頁。
9) マゼラン［マガリャンイス］「最初の世界一周航海」長南実訳、『航海の記録』大航海時代叢書Ⅰ所収（岩波書店1978年）626頁。
10) 生田滋『大航海時代とモルッカ諸島』(中公新書 1998年）38頁。

11）ホセ・デ・アコスタ『新大陸自然文化史』増田義郎訳、大航海時代叢書Ⅲ（岩波書店 1966）上巻430頁。
12）リンスホーテン『東方案内記』岩生成一他訳、大航海時代叢書Ⅷ（岩波書店 1978年）208-09頁。
13）*Discours of Voyages into the East and West Indies* (London, 1598; rpt. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum and New Jersey: Walter J. Johnson, 1974) 35.
14）Francis Drake, *The World Encompassed* (London, 1628; rpt. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1969) 84ff.
15）ランカスター「東インドへの航海」朱牟田夏雄訳、『イギリスの植民と航海（一)』大航海時代叢書第Ⅱ期17所収（岩波書店 1978年）112頁。
16）スコット「ジャワ滞留記」朱牟田夏雄訳、『イギリスの植民と航海（一)』大航海時代叢書第Ⅱ期17所収（岩波書店 1978年）123-245頁。
17）トマス・カーライルの文章を借りたが、主語を「音楽」から「祈り」に変えた。A. H. Moncur-Sime, *Shakespeare: His Music and Song*, 3rd ed. (London:Kegan Paul, Trench, Trubner, n. d.) 15.
18）愛宕松男訳『東方見聞録』東洋文庫（平凡社 1972年）全2巻。
19）*The Travels of Sir John Mandeville*, trans. C. W. R. D. Moseley (London: Penguin, 1987) 64-65；大場正史訳『東方旅行記』東洋文庫（平凡社 1964年）40頁。
20）C・H・ハスキンズ『十二世紀ルネサンス』別宮貞徳・朝倉文市訳（みすず書房 1989年）；伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス　西欧世界へのアラビア文明の影響』（岩波書店 1993年）；クラウス・リーゼンフーバー『中世思想史』（平凡社ライブラリ 2003年）参照。
21）Albertus Magnus, *Man and the Beasts (De aminalibus, Books 22-26)* trans. James J. Scanlan (Binghamton, N. Y. : Medieval & Renaissance Texts & Studies, 1987) 207-208.
22）James J. Scanlan, trans., intro. to *Man and the Beasts by* Albertus Magnus, 20；Ｐ. アンセル・ロビン『中世動物譚』関本栄一、松田英訳（博品社 1993年）179頁。
23）Edward Topsell, *The Fowles of Heauen or History of Birdes*, ed. Thomas P. Harrison and F. David Hoeniger (Austin, Texus: University of Texus Press, 1972) 105.